

# 浪化伝書『俳諧秘文抄』考

復 本 一 郎

小稿は、芭蕉の弟子、越中井波の瑞泉寺十一代住職浪化ろうかの著作とされている俳論書『俳諧秘文抄』を富士文庫旧蔵本によって翻刻紹介しつつ、検討を加えることによって、芭蕉俳論享受史の一側面を明らかにせんとするものである。

富士文庫旧蔵『俳諧秘文抄』は、浪化上人述縦十七・二センチ糎、横十一・五糎の小本で、墨付四十六丁、本文と同質の和紙を表紙とし、打ち付け書きで左端に「俳諧秘文抄」と記されている。まず翻刻本文を提示することよりはじめるが、翻刻に当っては、表記を現行の字体に改め、筆者によって句読点、濁点を施し、かつ、任意に章段を設け、通し番号を付した。また、原文の明らかな誤りは、その文字の右に（ママ）と付した。

一 『俳諧秘文抄』翻刻

俳諧秘文抄

応々山人撰

① 芭蕉翁は、昔、伊賀の国藤堂家に仕へ、武を以て業とせり。さるを、忠の為に禄を捨、義の為に髻を落してより、仏頂禅師に随て禅も又熟したり。其始、<sup>(ママ)</sup>桃池党の性松尾氏にて、<sup>(ママ)</sup>桃青と号す。東武の深川に住庵する事、年既に久し。窓前にはせをを植て春秋の榮枯を感じ。世の人、是より芭蕉庵の翁と呼ぶ。翁も其名の自然なる事を賞して、自らはせをと名乗たり。翁若き時より和歌をよくせり。季吟を師とし、武江の素堂を友とせしと。一夜、秋雨の蕭颯たる寢覚に、

はせを野分して盥に雨を聞夜哉

と此句に庭中の芭蕉を拈却して我号に得たり。嘗、禅師と茶話の詞有り。曰、道心を求んとするもの其始めの若、市中の愴忙に飽て幽谷に隠れんに、其始に飽ものは、又、おはりの寂莫にあかむ。されば、今日の是非に交りながら、其是非に遣はれずして自在に道を得ん事は、此俳諧に遊んで名利を厭んには如じと。是故に、禅と和歌を合せて、いまの正風体の名を得玉へり。故翁生前の句、おほくは観相也。正風体といふは、正とは其本心也、風とは姿也。幽玄とは、我吟魂のあそぶ所也。わが本心の正直より見けりたる、是をすがたにいひ顕す事也。されば、風雅は聊なる所に有りて、敢て花の榮枯なるにも有べからず。竹の一葉の風に翻り、萩の下葉の纔に靡き、さゝがにの糸引夕部より、目に触るもの皆幽玄にして、平生の営みあえる業ども一つとして俳諧にあらぬはなし。

② 禅に、一僧問曰、如何是仏性。答曰、芦花半輪月と。此一句、幽玄にして正見の人ならではの法身の仏性は知る

まじき也。又、問。如何是平生智。答曰、長床に飯有、粥有と。此一句平生也。只、風雅は正直なるを本意として、凡の人の唯の言いふを俳諧とは言べし。涅槃經には平等心是即菩提心トモ見えたり。風雅は、人生れながら天より得たる道也。是故に、愚かなる人といふ共、自ら花を愛し、月を翫ぶ事を知れり。其天性を知る時は、能五倫を和らげ、世の人情に通達して、雲井の憂をも知り、乞食の楽しみをも知るべし。近来は、俳諧も区々に成りて、剩、我が心にもあらぬ偽をかざり曲節と号して、あらぬ俳意を好む事、古翁の本意に非ず。道德に志のなきを歎て、翁も、俳諧に古人なし、とは申されき。詞に花を飭り、心に誠なきをば、唐土人も誠置れしぞかし。巧言令色多弃は、君子の大に惡む所也。常の人の立交りにも、言葉の直からんこそ嬉しかるべけれ。いかにもむつかしき弁舌はうるさき事なるべし。

③ 曲節といふ事、古来よりなきにしも非ず。一卷の中、二三ヶ所には過ず。好みてするにも非ず。其前句によりて自ら生ずるものと知べし。音曲の節はかせと言ふも、一つ／＼に曲の有事にも非ず。俳諧に地といふも同じ心也。只、流水の如く、やすらかなるを第一とせり。

④ 一卷の骨肉といふ事あれば、其動靜緩急を見計ふ斗りにてもなし。表裏といふは礼也、序也。序破急也。人の許へ行へきに着座よりいかにも無礼には有べからず。されど、終夜隅に頑なるは、礼の和なきものならむ。浮世のさがなき数々もいひ慰んやうきかまほしきなれ。是を表といひ、裏と言、名残といふは。立帰るさまの放逸ならんは禽獸の交りに等し。さるを、各膝立直して序の心に立返るこそ本意なれ。この故に、俳諧に禁句を別而慎むべし。

⑤ 発句に始中終の三有。始終の句法有。古翁の句は、始中終也。中頃より始終の句法に取扱へり。始といふは上五文字にて、天也。中は七文字にて人也。終といふは韻の五文字、地に象れり。発句の心得は、月花を愛れども、念着する事なかれ。飽迄花をあゐしても終には白雲に心を転ずるの事也。是を一句の変化とも、俳かいのにらみと

もいふなるべし。

⑥ 風雅と利とは格別と知べし。たとへば、

碓の居え所よし壁の蔭

此句、碓の居え所よしといふは理にして、下部の口にもいひ出すべし。壁の蔭は、風雅にして、作者のほねをる所也。如斯なる時は、一言万句にして、万端発句にならぬはなし。

⑦ 切字の事、古来より十八字に定りたる説もあれど、蕉門には曾て其沙汰有べからず。切れは断也といふ意にして、その意を切、その詞を切と言事也。心の切、口合の切といふ事、是等も自備れるものと知べし。中の切と言は、五七五の間へ手にはを入れたる事なるべし。挨拶の切といふは、座の句の五文字によく動をいふなるべし。

⑧ 発句は、其位の備ると備らざるを分別すべし。是は死活にて定べし。題の発句、歌仙、百韻の位、差別有べし。題の縦横といふ事、縦は豎也。昔より和歌に用ひ来れる花鳥風月の定りたるを言ふ也。横といふは麵棒、摺小木の俗を言。此故に花鳥風月を俗語にもてなし、疵を付る事なかれと也。横は格別にして、晒落を存分に任すべしとぞ。

⑨ 脇は主の意也。能く発句に対して、形ちの応ずるをよしとす。各別に挨拶の心を用ゆるにも及ばず。

⑩ 第三は、転句也。前二句の内外動静を見定めて変化すべし。第三振といふは、発句にも非ず、平句にも非ず。能その風姿を弁へ知べし。留りの事、何れも上へ廻る様に転動せざれば留らぬと知べし。されば、て、にて、らむ、もなし、に、など古来より定りたる手尔於葉にて、みな心のいひ残るを用る也。第三は、都て上の五文字に一句の全体を断るべし。此故に、上の五文字重き字を用るの教有り。

⑪ 四句目は、古来より軽くするといふ事、第三の留りのてにはの響を請て、是を四句目に断る也。各別に句意を

工む事なかれと也。

⑫ 五句目は、一卷の緩急を定る所にして、全体この一句に窮ると知るべし。

⑬ 六義の事、風とは其国、その所の風俗也。賦とは、見る所の風景を有の儘正直にいひ出す事也。比とは、物に準へて我が思ふ事を移す也。興とは、月花を見て、却て我心中の事を思ひ出す事也。雅は、正也、徳也と聖人の徳をうたひあらはす事にして、無徳の人は及べからず。頌とは、亡人の徳を歌ふ也。唐土には、是を以宗廟に献ず。(ママ) 仙家にて頌といふは、一句を以大悟せしむるをいふ。是また常人のおよぶ所にあらず。

⑭ 三十六句は、娑婆の現想をつらね、一句に三界遍満の念を説。其現想と言ふは、五倫の情に通達して、其哀を知り、智には智を以付合、愚には愚を以て付て、万端背く事なく、富貴に居ては富貴を行い、貧賤に居ては貧賤を行ふ。しかも、人間の盛衰を弁へ知るが故に、哀樂にも、又、着する事なく、其日その時の俳諧を知り、一口の變化を自在にして、能穩に暮しなば、一生の俳諧も、終に誤る事なからん。

⑮ 大切に臨みても能本心の風雅を守れば、死にのぞみても更にかはる事なからむ。死は、我風雅の終りなれば、其風情を忘るべからず。風人の常の樂みといふは、天地の變化、人間の盛衰ヲ知なれば、春秋は榮枯に面白く、人間は盛衰に感慨有。人生れて死せずんば、更に益なし。老少不定にして、無常の迅速なる社嬉しき(ママ)。されば、死の至来せん事、我人、所存の外、いまや斯成るべき共思ひよらざるに、ふらくと落去の夕に至るべし。倩、昔を顧に、昨日は今日の迷と成、今日はまた明日の為に迷ふ。悲と樂と往き通ひて、更に止時なし。限り有命を以、限りなき事をはかる事、皆妄想にして、是なる事一つもなし。杜少陵が詩に、人間万事皆非也、といえり。士農工商の隔もなく、亦は、宗匠の撰もなく、夫れぐの事業を営みながら、心の風雅に達し、浮世の是非に念着せずして、名利をいとひ、菩提心を求むべし。後世といふも遠く尋求に及ばず。今日座臥の中に備る也。只、風雅の扱一つに

て、悟入すべきことなり。蝦蟇荷葉に上りて法華を転じ、蜩蟬黃樹に啼て正覺を唱ふと言意を知らずんば、松風も、水の音も、仇に聞きなさむ。口に觀相をいひつらねて、あらゆる娑婆の事にころの満足すれば、貪り望む事も少く、無常の速なる事を弁へて、穢土を離るべし。詩は志也と釈して、其志を述べるの事也。されば、その意の趣善にして、他の妄想、妄念の生ずる事なければ、惡趣の種も少なからむ。詩は三百餘遍(ママ)なれども、畢竟は思無邪の三字に覆ふとかや。問曰、如何是捻華微笑の一句。答曰、思無邪と。又、摩訶止觀には、心に觀ずれ共、心に着すれば邪也、とも見へ侍る。風雅の大事に於ては、しかも心に着せず、又、善にも着せず、惡にも着せずして、其大道に至るべしと也。禪に山居の僧有。問曰、汝入定の時心有哉、否や。若し有といはゞ、蠢動皆入定せん。答曰、始念定の時有无の心を見ずと。又、曰、有无の心をみずんば何ゾ此山中に入て行動に苦しむと。是、翁の是非に任せて道に遊ぶ大本ならむ。

⑯ 翁、一日嗒焉として柱に倚て曰、風雅はたとへば、浮かべる雲の如し。風に臨みて一回は阜狗となり、一回は白衣と成て、共にその止ル所を知らず、と。是、去来因縁に任せて俳諧に生滅なき事を言へり。禪に、僧来て礼す。師問曰、面前に立者は何人ぞ。僧、答曰、風に任せて来り、風に任せて去ルと。終に是に示して曰、了々として不了々道々として不道々是則不任の道也。と。又、孔夫子の語にも、其用ひらるゝ時は行ひ、捨らるゝ時は、是を卷て懷にすと有も、去来因縁、天然に任せたる也。今、人多く俳諧に遣はれて、俳諧に着する故に、是を以て芸と覺へ、人にも敬はるゝが故に、名利に走り、却て邪智と成て、他の是非を譏る、是、本意に非ず。人に知られて更に益なし。大悟の後、速俳諧を知べし。俳諧を知て能く人情に通達し、是非に遣はれずして、変化自在ならば、生死もまた安からん。禪に所謂、生や雲に似て集り、死や水に似て速にさるといへるも、則風雅也。五老井没期に、

下手ばかり死ぬるものぞと思ひしに上手もしねば糞上手なり

と、尿糞の壺を打破して去る。また、其角は、

うぐひすの曉寒しきりぐす

と、直に春秋の榮枯に一生の速なる事を知ル。北枝、

書てみたり消したり果は罌子の華

と、虚実往来も此一句に反古と消し果て、しかもけしの花のもろきは、風雅の手柄ならん。是等の人は死に至る迄風雅を勤たりといふべし。

①⑦ 翁、或時、其角を誡て曰、人の短をいふことなかれ、己が長を説く事なかれとして、

ものいへば唇寒し秋の風

角、此句を得てより一生他の是非を言ずとなり。

①⑧ 俳諧は唯、思無邪也。禅に不思議不思悪、是を仏性共いへり。世人は、只、狂句綺語とのみおぼえて、風雅の本意を知らず。或人、問曰、何を俳諧の修行には致候哉、と。答曰、此道に至らんとすれば、他にみるべからず。

普く生あらんものゝ心にかはりて、それが苦樂を弁へ、人の心を我が心となして、其心を知る時は、親のこゝろを以、我が心とし、君の心を以、わが心となさば、いかで不孝不義のもの有らんや。花の夕の蛙、霜の朝の蜻蛉にも心を通はして、其心を知り、よく朋友と睦しからば、所謂、孔子は信有りと宣へり。他の心を以、我が心とするを、曾子は忠恕ともいへり。仏は教に大慈悲心と言も、此外にはあらじとぞ。

①⑨ 風姿風情といふ事、風情は心也、風姿は体也。物に感じて口に顯はるゝより風姿とはなれる也。されば、唯、口にばかり句をつらねて、本心誠ならずんば、偽にて、邪也。人として信なければ、多法に空く、其心に真有らば、神も仏も感応有べき也。我が心の風雅、句にあらはして姿と成れば、風情、風姿一体也。情は天理也。其本心直れ

ば、句も又直し。其情姦曲ならば、句も又奸曲ならん。故に、句作の正直なるを本意と教る也。何ぞ曲節を好べんや。

②① 一卷の運び、抑揚頓挫ト言、四季、恋、及雜の連綿、天地、陰陽有り、山に榮枯有、水に浮沈有。人に動靜血氣有りて、一身を自在に流通するが如し。又は、壯老に比して句をいはんに、莊ならん程は直に花やかに、老を迎へん程は、哀憐困窮を專一として、猶寂を要と願ふべし。其花実をしらざれば、徒事成べし。或御歌に、  
たのしみは夕顔棚の下すゝみてゝはてゝらに女は二布して

思ふとは汁かけ飯を食さしてをり箸そへて出すをぞいふ

かくの如き姿は、俳諧体にして正直に言顯するべし。鬼、幽霊、化物、狐狸の類、付合にすべからず。是皆怪也。怪力、乱神を語るべからずと。若、転動して実に取り扱ふ時は、既にその化ものに迷ふと言べし。

②② 釈教の付合、殊に大切なるべし。能々大悟すべし。前句仏といはんに、小善の功德を以付る時は、実に仏意を知らざる成べし。問曰、一切藏經功德有や、否哉。答曰、功德なし。又、曰、何が故に供養す。答曰、汝有眼なるが故に一切の藏經破古紙共いへり。仏法は、世に有。

松風を越して涼しき秋の月

終仏には成そうなもの

黒白の品社かはれ米の飯

是等の付合にて大かた工夫すべし。松風に吹れながら秋の月を詠めたる一念、他の願なければ、恐らくその心にて終らば仏ぞと、彼れを示し付たる也。猶三句目を平生に取なして、しかも其念一決をつけたる也。不用不捨の付合と言つて、有に着するものには無眼を以是をすて、無に着するものには有眼をもて是を取、充るものは是を削り、

退くものは是を進め、捨たるを拾ひ、用ゆるをすつ。如此ならば、一卷の俳諧カキ有無の中より出て、念着する事なし。畢竟、今日は今日の是非に執着なき事を第一に教たり。

②② 或人曰、蕉門の俳諧は何の為に作れるや。答曰ク、此俳諧を以心を自在に修行すれば、今日世間の通用に宜く、遠くは仏性にも至ルべし。つくぐ世間をみるに、唯、我と言ふものに侈りて、五欲ますく盛ん也。その愚かなる者は、金銀を貪り、中は名を貪り、上は徳を貪る。是、皆、変化の理を知らざるが故也。万物、始め有、終り有、常住なるもの一つもなし。春夏秋冬うつり変りて六十年、終に二万日には過ぎじ。沅湘日夜、東に流去て、愁人の為にとゞまる事、暫くもせず。限り有る命を以、限りなき世を貪る事、我といふものに遣はれて、穩ならず。念強悪に凝かたまりては適善を聞迎も、善に移らず、悪と知りても離れず、是、変化に疎きが故也。形は煩惱の為に得たれ共、心は本来空に移さば、などか移らざらん。儒には、天理共、本性共、是をいひ、禪には、仏性と教、神道には、神明の本体共言へり。風雅は、其本体より流出て、真なるものなれば、万法に通達して、その理に背く事なし。人間一生は、三十六句(マヤ)に終ると知べし。三世も遠く見るべからず。昨日は過去、今日は現在、明日は又未来にして、いまだ生死も知べからず。されば、今日の楽しみに今日を忘れず、怒り、腹立事の昨日に遣はれて今日も苦しきは、我ながら過去の因縁を引くと言べし。如此ならんときは、あすもまた穩なるまじ。右に交りて六ヶ敷時は、首を左に向け、右の過去を忘るべし。居所起居にも、皆過去有、現在有り。十界は我が一日の行動にして、みな具足したり。出る息は過去也、入る息は現在也。出る息、二度鼻に入るには非ず。念もまたかくの如し。されば、外より物の觸来りて動す事有連も、心を動すべからず。莊子、昔、江淮に舟を浮て釣を樂んとする時、樓舟の漂ひ来りて、此舟に中り、既に覆さんとす。莊子、怒りて、鋒を揮て、是を見るに其船に人なし。只、風の自然に来れる也。是より虚舟の二字を得て、終に怒りを鎮めたりと。人を以虚舟となし、秋風の如く無心ならば、更に逆する事

なからん。喜怒哀樂も、ともに久しかるべからず。みな其始め有、終り有物々、其始る時に早く其終りを悟るべし。進むものは、必退く。盛者は、速に衰ふ。樂しみに逢ふ時は、樂の娑婆へ生れたりと觀じ、苦しき時は、苦しき娑婆へ出たりと觀ずべし。万事、皆、時々刻々に流れ去る風、無心に吹けども、終に又鎮る。況哉、有情のものまたなんぞ久しからむ。

②③ 俳諧は、強て口に斗り唱ふるものに非ず。心をよく此道に達して、是非變化自在ならば、一句の俳あらず共、吾が高弟也、と翁はの玉ひし也。されば、譬ひ口に金言妙句を作り出す共、不慈不孝にして、己が邪智に誇り、物の弁へもなく、物の哀も知らず、己が命だに死失せん弁もなく、物いまひなんどの名聞に走る輩は、桜の下に伏たる犬の、花の香を知らざるにひとし。一日の我行道は、俳諧也。朝、むく起に目をさすりながら、空を詠めて、立小便はいかに無念の発句ならずや。水に臨みて口を漱ぎ、顔を洗ひてかたへの檣に眼の涼しきは、不易の脇に非ずや。されば迎、終日外に立尽すべきにも非ず。蕙の上に打ねまりて、五器、箸に樂しきは、第三の變化なり。如此なれば、一日の我が事業、是有、非有て、しかも其是非に迷はずして、俳諧の首尾は終るべし。

②④ 或時、

足あぶる亭主に問へば新酒哉 晋子

翁、此句を見玉ひて、汝が風雅も魂を得たりとほめ玉ひしと。其角が生質、たゞ曲なる事を好みて、淋しき念なし。さるを、巧言をすて、言葉の平生に落たれば、行末たのもしと許し玉へり。

十団子も小粒に成りぬ秋の風 許六

是を聞玉ひて、既に俳諧の骨髓を得たりとの玉へり。是は我智にほこらずして、風情の寂しみをほめ玉へり。  
のみ風馬の尿するまくらもと

一本ハタトモ  
みちの辺の木槿は馬に喰れ鳧

此二句、翁の作にして、其場、其時の自然也。唯、正直にして、更に曲なし。我に風雅の信有る時は、たとひ士は奴にせらるゝ共、其君を恨みず。変化の俳諧にして、しかも忠義を守ると知べし。能其念至れば、士農工商、夫々の業に疎からず勤をわが慰にせば、更に倦事なからむ。六祖の骨折も、碓に念の有らば、いかで大悟すべきや。心は青雲に遊んで、三千世界に渡るべし。五倫の礼、能備りて、死に至る迄堅固なれば、是非自在にして、非道なる事をのぞまず、去来因縁に住する故に、是を俳諧の道と言ふべし。

②⑤ 翁は、常に、杜少陵が詩の伐木丁々<sup>トシテ</sup> 山更<sup>ニ</sup> 幽也、と言一句を称して、俳諧も此悠遠に習へとの玉ひ、又、<sup>(ママ)</sup>又、歌に、

遁出る焼野、雉子峯に又おどろく斗り咲つゝじかな 長嘯子

と聞へし歌をもて、風色を是に習へとの給へり。

むさし野は月の入べき山もなし草よりいでゝ草にこそいれ

此下の句、理屈にして、更に風雅なし。尾花が末にかゝる白雲といはゞ、風雅にして、理屈なしとぞ。是等の境、よくくゝわきまふべし。

②⑥ 昔、翁、肥後の山中をこえ玉ふ時、五十斗の男、夫レが妹と覚しきが、供に薪をおろし、坂中に休らひ居たり。女は男の苦を訪ひ、男は女をいたはる有様、翁、近くよりて曰、爰等あたりの人にや、大儀に社、と有ければ、男のいへらく、賤は向ふの山の洞より日毎に女夫薪を負ふて城下へ売なし、其日の糧を求め、日暮れば家帰り、終夜仏恩を悦ぶの外他念なし、山中に労るゝ時は足をそらして空の雲を見る、此樂しき事、翁も知り玉ふまじ、といへり。翁、此詞を愛玉ひ、門人にも物語られける。されば、富る女の美かなるも、妬有らば怖しく、傾城のいつくし

きも、偽がちならば口惜かるべし。中々賤の女にこそわりなき妹背はあれと、愈かんじ給へりとなん。戯れ言に似たれ共、有がたきさまなれば、書付たるよし古き書に見えたり。

②⑦ 翁、一とせ文月斗り陸奥行脚を経て越路へかゝり玉ひけるに、直江の津とやらん言所の或寺に立寄、此寺に知音の人の添書持たり迎、やどを乞玉へるに、旅労の上、笠は風雨に吹破られ、見る蔭もなき有様を、主の僧、ものかげに窺ひ見て、よしなくや思ひけむ、宿はなりがたきよし申す。翁、何となき風情にて、仏前に一礼して立出給へるを、番僧共引とゞめ、俳諧の上手なるよし、発句してたべと望みあえり。翁、安き事よとて、筆うちしめして書付玉へる事数多に及べり。曾良、大に腹立て引立まいらせて、曾良、申けるは、誠に時こそあれ、秋の日の敏う短く、山の端近く暮るにぞ、宿かすべくもなき所に無用の振舞にこそ、と腹立ける時、翁は、門前の石に腰かけながら、曾良を制して曰、さ様の心底にては行脚の一筋の覚束なく候、始思ひ立ぬる時より、何レの木の下にも一夜を明し、因縁に任せて行脚すべき覚悟ならずや、かゝる折にこそいとゞ仏説の芳恩も尊まれ、娑婆の哀も我身にふれて俳諧の大道には入べき也、其上、宿せぬ主の心と、発句望める僧達の心と人も格別なり、大節に臨んで奪べからず、造次にも能くし、顛沛にも能すと社見え侍れ、と杖曳ながら立出玉へりし。折から、竹風と言者留まいらせて、茅屋にも休らひ玉はんや、といえりければ、翁曰、御こゝろざし有がたく候得共、添状も有ける方を空しく過て、外に一夜を明さんはいはれがましく覚え侍る、とても成べき筋なば、始の主の軒の妻にても立明したきよし申されけるを、竹風聞て、いと安き事也、幸ひ吾が菩提寺なれば、いかようにもと、倡ひける時、石鉢の水を手づから汲かけ、足など洗ひて、仏前の傍に安座し給へり。次の間に曾良が畏りたる有様、尋常の人共見へざりける。

文月や六日も常の夜には似ず

と言句も此時成るべし。奥羽の行脚に曾良を供とし玉へる事、曾良は生質、虜撓まず、目瞬ず、いかさま岩頭に倒

れ死せんに客易介錯して去るに吝ならざる勇有を頼て也。

②8 始、翁を毀り欺きたる族も、彼是有たれ共、終には己がかたより便求て恨を忘れ、其人を直くし、ちなみ玉へるよし。翁、俳諧を勤て、終に俳諧を忘たるより、此道は達し玉へるならん。孔子の所謂恨みを報ずるに徳をもてすと曰しなるべし。今の人、俳諧を利口を以、却而邪智となし、無風雅の人を侮り、他の善惡を論じて人を笑ふ。

此故に变化自在の境に至て已後、速我俳諧を忘るべし、とぞ。

②9 翁、難波津の旅宿に病の急迫なれば、門人の誰彼レ馳集りて、良医を求んと区々なる時、翁、枕を上て曰、死生命有り、富貴天にあり、人力の及ぶ所に非ず、されど妻子眷属持る身は残りての後悔をふせがんと本意なくも命を求るあらん、我はしからず、浮雲流水の孤客、何が為に命を貪らんや、五十年来娑婆の俳諧に遊んで、露命今日に至る、是幸ひ也、我一生の俳諧も、行脚も、今日、死の一大事を能くせんが為也、我風流に至り、今日より薬をすて、臨終をまもると、手づから墨すりて、

(ママ)  
旅に寝て夢は枯野をかけ廻る

と一句に一生は終り玉へり。此句、辞世のやうにぞ心得たる人も有よし、さには非ず。人は死する迄、父母の恩愛を忘れざるを孝といふべし。今、父母の地を離れて旅に終る、何ぞ父母を慕ひ思はざらんや。

③0 翁、西国行脚の時、再び古主にまみへて、

さまざまの事思ひ出すさくら哉

此句、興の体にして、花は昔ながらにして、人の有為転変の有様を觀じて哀れ也。

稲づまにさとらぬ人の尊さよ

(ママ)  
此句は我見を禁めたる也。石火雷光は猶鈍しと、死の火急なるを大悟して、いまはの時も覚悟すべき力のあらんは、

よしなき振舞也。哀に、穩かならん社、風雅なるべし、稲妻に張臂せん力のありては、真の正見とはいふべからず。いなづまのもろく、哀にして、淋しきとみるこそ正直なれ。譬ひ、正見する共、形脱脚さざるほどは、いまだ火宅は遁れず。眼光露脱、<sup>(ママ)</sup>真の正見とやいはむ。

③① 道は、自在にして至ると、外より来るに非ず。其人能く其人をしる。宝積禪師、臨終の時、門人の悟道を試んと言ひ。普化和尚、末座より立て、筋斗を打翻す。是、俗言、蜻蜓返りの事也。是、何の処に悟道有りや。禪師、笑テ普化に付属すといへり。

③② 翁、生涯五十余年、花実一朝の嵐に吹れて、夢の如く、泡の如し。生前の心に任せて、都の榮花なる地を避て、みる人もなき木曾寺に其遺骨を納めたり。没後、その所々に残りたるたんどく、文章などは、許六、買もとめて、烟と焼捨たり。其意趣は、遠き国々へ流散して、彼は善、是は悪と、愚昧の口に評咤せられんは口をしき事也と。人去て速に跡なきにはしかずと。誠に翁の志をよく知りたりと誉べし。老子曰、名の名とすべきは常の名に非ず、大徳は徳を失す、是以徳有、下徳は徳不失、是を以て徳なしと。されば、大徳は音もなく、臭もなし。今の世の人を見るに、俳諧をもて却て名利の種とする事、<sup>(ママ)</sup>古翁の本意に非ず。かゝる人は、終にその大道を知らず。俳諧を芸の様におぼえて、上手下手と批判して、其心の至ると、いたらざるを知らず。其名の世上へ聞え、人にも敬れて、一座の上に立ん事を好み、吾が門人と呼び、物にもしるし、巧言令色を専らとして、大欲無道の輩有。恐るべきの至極也。

③③ 翁、生前に七度の変化は、前に作の尽て、模様を好まんとにはあらず。門人の心一致して念着する故に、変化自在を導んとの趣を知らしめて、俳諧は善惡不二門、是非に抱らざる事を示す。後人、誤て惡をなしても、不二門<sup>(ママ)</sup>を許し、無斬無愧にして是非に拘らざる事と思へるは、天地懸隔也。旧来の惡に着すべからず。速に善に移るべき

事に社。惡を不二門と捨たり。譬へば、僧来問曰、我に從來の罪有、懺悔せんや否。答曰、汝、從來の惡を尋て、提来せよと。此意は、一つく其惡を手にて提て持来れと也。其罪、尋るに所なし。頓て大悟す。又、一僧来問曰、我に罪有る時は、仏に向て是を懺悔して、是をまぬがるべし、若、其仏を打潰さんに、其罪、何に向つてかざんげすべきや。答曰、露也、当來の惡をもて不二とは許さず。

③④ 俳諧猿みの、炭俵の二集を俳諧の古今集なりと現して、風姿此二集にとゞまれり。さるを、曲節を専らにして、二集の風姿はふるしなど言るは、古翁の俳諧を破却する天魔也。罪免すべからず。近頃の俳諧を見るに風姿は語にかまはず、一句の新しみを本意として、ひたすら曲節を好む。譬ば、屏風の直なるは古しと、逆に立る、是を新みとし、五器の尻にて水を飲み、庖丁にて味噌もすり、雷木<sup>(ママ)</sup>にてものを切らんとする類じ、順を捨て、逆を取る。如斯成り行時なれば、俳諧の五ヶ八体といふ事、近頃は伝授口決と号して、価を取て是を許す者有と。其罪少なからず。古翁生前に、かゝるさたをきかず。俳諧上手に至れば、自ら備るもの也。五ヶ八体の外に別の付方なき故也。<sup>(ママ)</sup>

五ヶ八体より出たる俳諧にあらず、俳諧有りて後に定めたる名也と知べし。

③⑤ 近年は、殊勝なる行脚はみえず。たまく見るに、多くは俳諧のかすに酔ふて、たゞ放逸を風雅の大道と覺へて、理なくして、しかも貪る心深し。かゝる輩は、嶮難<sup>ケンナン</sup>を経る、是を浮世の修行と覺へたる也。されば、驕慢奢侈の心のみ盛んにして、果は他のよしあし迄觸歩行事を行脚と覺えしならん。昔、和及法師のいえる、無徳の行脚、ゆくさきぐにて蕉門と号し、翁を冥暗のつみに落さん事、いと口惜し、我は生涯行脚の思ひ絶たりとなん。まことに尊き事也。

③⑥ 往昔、西行、杣の尾へ参りて、明恵上人に礼する事有り。上人曰、西行は世に聞及びたる殊勝の道心者なるよし、されど月花に深くめで、狂言綺語の和歌を好み玉へるは本意なし、と宣ひける時に、西行の曰、左には侍ら

ず、我が歌は、皆真言にて候、と申されければ、上人手を合せて誤り感じ玉へるよし、善き人はいかにかくまで有がたきぞ。

③⑦ 兼好法師の歌に、

友ならぬ人の訪ひ来て長居すはひとり有るよりわびしかりけり

となん。我に等しき風雅の友なき事をなげき玉へり。畢竟、ものいへばむつかし、たゞ口を閉て心に雲外の友を求めんにはしかじ。言葉を替る人も、毀る人も、ともに世に駆<sup>トビマハ</sup>らず。聞人もまた速に去るべし。人に悪をせよともあらず。名を貪る人のためにいふ、今の人俳諧を流行唄のやうに覚へたるは、畢竟、道德に疎かなるが故也。兎や角といふまに、いつしか無常の風吹来りて死なざらむ。されば、死をもつて風雅の終りといふ時は、死しての知名も、徳も、更に益なし。皆妄想にして、跡かたもなし。此書も、みる人去て後は、紙屑籠に納りて、果は油ぎらの為につかひ捨られ、瘦犬のあらそひと成りて速に去るべし。

文政五のとし菊月

かつしか  
老茄園謹写之

畢

天保六<sup>乙未</sup>秋長月

山崎吾友雅公のもとめによりて不二川のほとりなる永哉若水老漁拙き毫をそむる時、年六十有二歳也。

右上人伝、和漢文操、又、俳家畸人談等に出たれば略之。

## 二 『俳諧秘文抄』の性格

富士文庫旧蔵の『俳諧秘文抄』は、小稿冒頭に記したごとく、題簽には、「浪化上人述俳諧秘文抄」とあり、右の翻刻に見える通り、本文巻頭には、「俳諧秘文抄 応々山人撰」（応々山人は、浪化の別号）とあることによって、浪化によって著わされた俳論書としての体裁をとっている。そして、巻末に、まず、「文政五のとし菊月 かつしか 老茄園謹写之」とあることから、富士文庫旧蔵『俳諧秘文抄』の原本が、文政五年（一八二三）九月、老茄園なる俳人によって写されたものであることを知る。

そこで老茄園であるが、「老茄園」は、当初、素堂門で『五色墨』のメンバーの一人馬光の別号であったが、代々受け継がれており、右の「老茄園」は、不于ふうのことではないかと思われる。錦江編『葛飾蕉門分脈系図』（嘉永末年成）には、左のごとく記されている。

不于 四世老茄園 南蔵院

武州岩槻領内牧村に住し、修現たり。文化十二年亥三月法券にすゝみ、老茄園をうく。

しかして、不于の写した『俳諧秘文抄』から、これも右翻刻の巻末に見える通り、天保六年（一八三五）九月、不二川（富士川）の俳人、「永哉若水老漁」（読みは、田中善信氏の御教示による）によって転写されたものが、富士文庫旧蔵の『俳諧秘文抄』というわけである。「永哉若水老漁」については、明らかにし得ない。富士文庫旧蔵『俳諧秘文抄』について知り得ることは、これだけである。

ところが、この『俳諧秘文抄』、部分的に多少の字句の異同があるものの、文政十二年（一八二九）の序のある、

これも浪化の著作とされている板本（橘屋治兵衛梓）『俳諧正語抄』と同一の内容であったのである。しかも、板本『俳諧正語抄』の序跋は、その伝来のいきさつ、その他について語っているのである。

そこで、まず、『俳諧正語抄』の校訂者である「羽鶴岡」の俳人泉響園琴而の序文より必要箇所を東京大学酒竹文庫本によって摘記してみる。この場合も、右翻刻と同様、筆者によって、句読点、濁点等を補うことにする。

此一巻は、羽黒呂丸の家に伝へて、年久しく煤びて、虫のすみかとなれるを、赤谷の湖山、取出きたりて、予が若き頃、父なる荷晩に見せける。くり返し見て曰、こは、越中の国に人も名も高き浪化公の漫筆にして、祖翁の正語を挙て、専正風体の意を示されたるにて、此道の規範と云べし。

続けて「男文成」（琴而の息ということであろう）の跋文をも、同様に摘記してみる。

応々山人、仏学のいとま、傍、蕉門の俳諧に遊び、其世の俳諧に志せる輩も、ともすれば、其本を失ひ、其末にはしるを、なげきて、此撰ありけらし。されば、思無邪の正語により卵有毛の曲説をいとひ、ひたすら祖翁の教にもとづき、末の乱ざらんことを慮るなるべし。見る人よく本末にこゝろをとゞめて、岐にまどはずば、則、山人の此道に功あるを、誰か仰がざらめや。

琴而の序文によって『俳諧正語抄』の伝来の経緯を、文成の跋文によって、浪化が一書に意図したであろうところのものを知り得るのである。すなわち、『俳諧正語抄』は、これも芭蕉の弟子の一人、元禄六年（一六九三）に没している、俳論書『聞書七日草』の著者（とされている）図司呂丸ろがんの家に伝わっていたものであるというのである。ただ、浪化の芭蕉入門を通説のごとく元禄七年（一六九四）とすると、この伝来説には、たちまちにして矛盾が生じてくる。一方、文成の跋文に見えるところの、浪化が仏学（仏道修行）の合間に『俳諧正語抄』を著わしたであろうとの推測は、浪化が越中井波の瑞泉寺十一代住職であつてみれば、首肯し得るところではある。

なお、序文中に見える琴而の父羽州鶴岡の俳人荷曉は、享和三年（一八〇三）に没しているので（平林鳳二・大西一外著『新選俳諧年表』参照）、荷曉が呂丸家伝来の『俳諧正語抄』を披見したのは、当然、それ以前のことということになる。ちなみに『俳諧正語抄』、荷曉の二十七回忌追善の出版である。

彼<sup>かれ</sup>此検討するに、『俳諧秘文抄』（写本はなお数本伝わるようであり、それらの検討は、今後の課題としたい）、あるいは『俳諧正語抄』と呼ばれる、そして浪化の著作とされる俳論書は、時をほぼ同じくして、出羽地方と、葛飾地方に伝来していたことを知るのである。

本書が浪化の著作によるものであるかいなかの即断は避けたいが（後述するごとく、むしろ偽書の可能性が強い）、江戸後期における一つの芭蕉俳論享受の様相を窺うには、すこぶる興味深い一本であることは間違いない。以下、先行諸俳論書に目配りしつつ、内容の検討を試みてみることにする。

なお、『俳諧秘文抄』と板本『俳諧正語抄』との本文の異同であるが、『俳諧正語抄』の不明の箇所が、『俳諧秘文抄』によって明らかとなる場合が少なくないことを指摘しておく。また、浪化の俳論書として確実視されている『随門記』との内容上の直接的かかわりがないことも、ここで断っておく。

### 三 『俳諧秘文抄』の素性と他の蕉門俳論書

いよいよ内容の検討に入ることにするが、まず、『俳諧秘文抄』と他の蕉門俳論書とのかかわりを探ってみることはじめたい。が、明確な影響関係は、ほとんど見ることができない。ということは、『俳諧秘文抄』が、その内容の質的問題はしばらく措くとして、ともかく俳論としての独自性を示しているということであろう。

唯一、先行俳論書として参照したことが確実であるのは、支考の元禄五年（一六九二）刊『葛の松原』である。私が『俳諧秘文抄』に任意に付した通し番号⑩の、

翁、一日嗒焉として柱に倚て曰、風雅はたとへば、浮カべる雲の如し。風に臨みて一回は阜狗となり、一回は白衣と成て、共にその止ル所を知らず、と。

の部分は、『葛の松原』の本文冒頭に、

芭蕉庵の叟、一日嗒焉（トウ エントシテ）うれふ。曰、風雅の世に行はれたる、たとへば片雲の風に臨めるがごとし。一回は

皂狗（クロキイヌ）となり、一回は白衣となつて、共にとゞまれる処をしらず。かならず中間の一理あるべし、とて春を武

江の北に閉給へば、雨静にして鳩の声ふかく、風やはらかにして花の落る事おそし。

と記されているものをアレنجジしたものであることは、一読明らかであろう。『葛の松原』は以下八古池や蛙飛こむ水のをとゝのエピソードの紹介へと移るが、『俳諧秘文抄』は、右の一節を解説敷衍している。今、その内容に立ち入って注し、検討することはしないが、ここでついでに、その解説敷衍の文章中に引用されている許六、其角、北枝の辞世の作品について検討を加えておく。三作品がこのように一つに論じられている例は、管見の範囲ではない。そこで、一つ一つについて典拠を指摘しておく。第一番目の許六の辞世の狂歌、

下手ばかり死ぬるものぞと思ひしに上手もしねば糞上手なり

であるが、これは、許六が没した正徳五年（一七一五）に刊行されている俳論書『歴代滑稽伝』中の巻末に次のごとく掲げられているものによつたものであらう。

辞世

一 時 打 破 屎 糞 壺

芬<sup>タル</sup>々 臭<sup>ス</sup> 氣供<sup>ニ</sup> 梵天<sup>一</sup>

下手ばかり死ぬる事ぞとおもひしに

上手も死ねばくそ上手なり

#### 菊阿仏末期書

「菊阿仏」は、許六の別号である。狂歌の前書は、屎糞壺を打ち破つて、その臭氣を梵天に供えよとの意。第二番目の其角の辞世の句、

うぐひすの暁寒しきりぐす

は、措辞の共通性等に注目すれば、恐らく、宝永四年（一七〇七）刊の支考編『南無俳諧』によつたものであろう。『南無俳諧』中の俳論「俳諧未来経」の部分に次のごとく記されている。

其角は（中略）ことしきさらぎの末に身まかり侍りしが、辞世に

鶯の暁ちかしきりぐす

されば最後のありさまにて人の善悪はさだむべしといふは、此辞世にてよく知りぬ。誠に蕉門の高弟にして、天下の舌頭を坐断すといふべし。一句に一生の変化をつくし、一句に春秋の榮枯をあらはし、一句に明暮の存命をかなしむ。

『俳諧秘文抄』が、一句を評して「直に春秋の榮枯に一生の速なる事を知ル」と述べているが、右に引いた『南無俳諧』の一節中の「一句に春秋の榮枯をあらはし」との符合は明らかであろう。ちなみに、其角の没年は、宝永四年（一七〇七）である。この辺に、先の許六の没年とともに、『俳諧秘文抄』の素性が明らかとなってくるのであるが、なお、第三番目の北枝の辞世の句、

書てみたり消したり果は罌子の華

と、先行俳書の関係を見てしまっておくことにする。北枝の没した享保三年（一七一八）に刊行されている北枝追善集、霸充編『けしの花』に左のごとく見える。

趙士やまひに臥事日あらずして云、吾消息旦暮にせまれり。ねがはくは古翁の忌日に終をとらんと。はたして五月十二日たゞちに揮毫一句を残す。

書て見たりけしたり果はけしの花

是を手づから予にあたへて、永く詠吟の唇を閉。

「趙士」は、趙翠台とも号した北枝を指す。『俳諧秘文抄』の記述は、右の一節を参照してのものであろう。

そこで、いよいよ、右の蕉門三俳人許六、其角、北枝の辞世の作品の記述を通して窺える『俳諧秘文抄』の素性である。

『俳諧秘文抄』、あるいは『俳諧正語抄』の作者とされている浪化の没年は元禄十六年（一七〇三）である。享年三十三歳。そして、右に記しておいたように、許六の没年は正徳五年（一七一五）、其角の没年は宝永四年（一七〇七）、北枝の没年は享保三年（一七一八）である。もう、おわかりいただけただけなことと思うが、少なくとも、通し番号⑯の『葛の松原』を参照しての記述と思われる箇所が続く部分は、『俳諧秘文抄』の著者浪化の没後の記述であることは明らかである。この箇所のみの記述をもって、『俳諧秘文抄』を偽書と即断することは早計に過ぎるかもしれないが、他に、例えば、通し番号⑳のエピソードが「昔、翁、肥後の山中をこえ玉ふ時云々」と書き始められる時（『俳諧秘文抄』は、「肥後」は「越後」の誤りであろうと疑っているが、板本『俳諧正語抄』は、「肥後」で通している）、その疑念は、ますます強いものとなるのである。周知のごとく、芭蕉は、生前、九州、四国へ足を踏み入れる

ことはなかったのである。それにしても、一部の記述をもって、全体の真偽を云々することは、なお早計の感免れないことを承知で、結論めいたことを述べるならば、『俳諧秘文抄』、あるいは『俳諧正語抄』は、浪化仮託の偽書としての色相のすこぶる濃い俳論書であると言えそうである。しかし、たとえ偽書であったとしても、芭蕉俳論享受史の視点より眺める時に、すこぶる興味深い資料であることは間違いないところである。

\*

ここで、『俳諧正語抄』の序で、泉響園琴而が「越中の国に人も名も高き浪化公の漫筆にして、祖・翁・の・正・語・を・挙・て、専・正・風・体・の・意・を示・され・た・る・に・て、此・道・の・規・範・と・云・べ・し。」と述べているところの「祖翁の正語」、すなわち『俳諧秘文抄』が引用するところの芭蕉の遺語に逐次注目し、検討を加えてみることにしたい。

まず、通し番号②に、「道德に志のなきを歎て、翁も、俳諧に古人なし、とは申されき。」と見える。ちなみに『俳諧正語抄』での措辞は、「道德に志の人なきを憂ひて、翁も、俳諧に古人なしとは歎きたまへり。」となっており、少しく異同がある。それはともかく、「俳諧に古人なし」との芭蕉の遺語は、蕉門俳論書関係に多出する。はやくは、元禄七年（一六九四）三月の不玉宛去来論書をはじめとして、北枝の『山中問答』、支考の『葛の松原』『二十五箇条』『続五論』、土芳の『三冊子』等である。惟然も、俳諧撰集『初蟬』（風国編、元禄九年刊）序に書き留めている。前後の措辞とのかかわりから言えば、支考の『葛の松原』中の「俳諧に古人なしということを、ばせを庵の叟、つねになげき申されしか。」に近いが（特に『俳諧正語抄』は）、「道德に志のなき人を歎て」「道德に志の人なきを憂ひて」の部分は、『俳諧秘文抄』、あるいは『俳諧正語抄』の解釈、すなわち、本書の執筆者とされている浪

化の解釈ということになる。芭蕉の遺語の一つの解釈のされ方として、すなわち、芭蕉俳論享受の一樣相として、②全体の文章の中で見る時、これはこれで、興味深いものがある。

通し番号⑪には、「翁、或時、其角を誡て曰、人の短をいふことなかれ、己が長を説く事なかれとして、ものいへば唇寒し秋の風、角、此句を得てより一生他の是非を言ずとなり。」とのエピソード、ならびに芭蕉遺語（遺句）が見える『俳諧正語抄』も概ね同じ。⑪の読み方にもようが、「人の短をいふことなかれ、己が長を説く事なかれ」は、言うまでもなく、芭蕉の言葉ではなく、『文選』中の崔瑗の「座右銘」にある「無<sup>レ</sup>道<sup>フコト</sup>人之短<sup>ヲ</sup>、無<sup>レ</sup>説<sup>クコト</sup>己之<sup>ニ</sup>長<sup>ヲ</sup>」に拠っている。史邦編、元禄九年（一六九六）刊『芭蕉庵小文庫』は、それをそのまま前書として、

#### 座右之銘

人の短をいふ事なかれ

己が長をとく事なかれ

物いへば唇寒し秋の風

の形で載せている。また、支考編、享保十二年（一七二七）刊の『和漢文操』卷之三「関口の聯」は、一句にかかわって、

此発句のはじめは、唐紙の三半なる物に書て、芭蕉庵の柱かくしなるを、洛の去来子が物数奇より、落柿舎の聯（筆者注・豎長の板に書て柱に掛るもの）となせるよし。祖翁の一行物といひて、其類は世にまれなるべし。

このエピソードを伝えている。が、この範囲では、⑪の芭蕉遺語（遺句）にかかわって、其角の名は浮上してこない。ところが、大磯義雄氏架蔵の好問堂編の俳諧作法書『中秘抄』には、「晋子に教の句に」との前書がある由（乾

裕幸・櫻井武次郎・永野仁編『芭蕉全句集』桜楓社、昭和五十一年三月刊、参照）。それとは別種に、この句文（遺語・遺句）が其角（晋子）がらみで伝えられている資料として、注目しておいてよいかもしれない。

次に、通し番号②③の「俳諧は、強て口に斗り唱ふるものに非ず。心をよく此道に達して、是非変化自在ならば、一句の俳あらず共、我が高弟也、と翁はの玉ひし也。」を検討してみる。『俳諧正語抄』には、「俳諧は、あながちに口に斗唱ふるものにはあらず。心よく此道に達し、今日の人情に通達して、是非変化自在ならば、一句の俳あらずとも、我高弟と翁はのたまへり。」とある。この遺語と同じものは、管見の範囲では見付からなかったが、土芳の『三冊子』中の「はいかいはなくても在<sup>ある</sup>べし。たゞ世情に和せず、人情通ぜざれば人<sup>ととのはず</sup>不調。まして宜友<sup>よろしき</sup>なくてはなりがたし。」や、北枝の『山中問答』中の「けふの変化を自在にし、世上に和し、人情に達すべし。」そして、支考の『続五論』中の「俳諧はなくてもありぬべし。たゞ世情に和せず、人情に達せざる人は、是を無風雅第一の人といふべし。」等の遺語と、論旨を同じくするものであろう。

通し番号②④には、其角（晋子）句△足あぶる亭主に問へば新酒哉△を評しての「汝が風雅も魂を得たり。」、許六句△十団子も小粒に成りぬ秋の風△を評しての「既に俳諧の骨髓を得たり。」との二つの芭蕉遺語が見える。其角句、△足あぶる亭主にきけば新酒哉△の句形も伝わるが（『句兄弟』等）、『俳諧秘文抄』の句形は、『五元集』のものである。前書は「野店無肴核」。が、「汝が風雅も魂を得たり。」の芭蕉遺語を伝える俳論書は、目下のところ見出し得ない。私は、先に、通し番号①⑥の条の検討を通して、『俳諧秘文抄』、あるいは、『俳諧正語抄』が、浪化の著作であることを疑ったが、かかる独自の芭蕉遺語を採取している事実を、どのように解したらいいのであろうか。やはり、『俳諧秘文抄』あるいは『俳諧正語抄』の原点に、核となったところの浪化系伝書が存在を想定してもよいのであろうか、あるいは、まったく根拠なく捏造された遺語なのであろうか。其角句評とともに掲出されている許

六句八十団子も小粒に成りぬ秋の風Vの句評としての芭蕉遺語「既に俳諧の骨髓を得たり。」の方は、例えば、許六自身によって書かれた『本朝文選』中の「直指ノ伝」に「汝いづれの教ヲシヘによって、愚老が流を見届たるや。」をはじめとして、同主旨の記述が諸書に散見するだけに、その判断に、なお迷うところである。

通し番号②⑧の「今の人、俳諧の利口を以、却而邪智となし、無風雅の人を侮り、他の善悪を論じて人を笑ふ。此故に變化自在の境に至て已後、速我俳諧を忘るべしとぞ」も、「今の人……忘るべし」までとするか、「變化自在の境に……忘るべし」までとするかに意見が分れるであろうが、芭蕉遺語と見てよいであろう。支考の著作である元禄八年（一六九五）刊『笈日記』の元禄七年十月八日の条の芭蕉の遺語、

はた生死の転変を前にをきながら、ほつ句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に籠て、年もや半百に過たれば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の声におどろく。是を仏の妄執といましめ給へる、たゞちは今の身の上におぼえ侍る也。此後はたゞ生前の俳諧をわすれむとのみおもふは。

と、どこかに通うものが感じられなくもないが、直截には繋がらない。となると、この遺語も、他に所見はなく、『俳諧秘文抄』（『俳諧正語抄』）独自のものとして注目しておく必要がある。

遺語としては、もう一つ、通し番号②⑨の条に、「死生命有り、富貴天にあり、人力の及ぶ所に非ず、されど妻子眷属モテ持る身は残りての後悔をふせがんと本意なくも命を求るあらん、我はしからず、浮雲流水の孤客、何が為に命を貪らんや、五十年来娑婆の俳諧に遊んで、露命今日に至る、是幸ひ也、我一生の俳諧も、行脚も、今日、死の一大事を能くせんが為也、我風流に至り、今日より薬をすて、臨終をまもる。」が見える（『俳諧正語抄』は、末尾「我風流に至り」の部分が「我風雅のかぎりに至り」となっており、こちらの方が文意が把握しやすい）。が、この遺語は、完全なフィクションと見做してよいであろう。なぜならば、芭蕉の臨終を正確に描いた其角の元禄七年（一六

九四) 刊『枯尾花』に収められている「芭蕉翁終焉記」や、先にも引用した支考の『笈日記』には、右の芭蕉遺語は見えないのである。そして、何よりも、右の芭蕉遺語を採録している浪化その人は、芭蕉の臨終に立ち会っておらず、浪化が芭蕉の死(元禄七年十月十二日没、享年五十一歳)を知ったのは、一ヶ月以上経つての十一月二十日のことだったのである(殿田良作稿「釈浪化」、明治書院『俳句講座 俳人評伝 下』昭和三十四年四月刊、参照)。ただ、右の遺語が、客観的に検討した場合に、フィクションであることは間違いないとして、少なくとも『俳諧正語抄』が板本として流布した文政十二年(一八二九)以降、俳人を中心とする多くの読者に、直弟子浪化によって書き留められた芭蕉の遺語として、深い感銘を与えたであろうことも十分に考えられることであり、芭蕉享受の視点より眺めれば、すこぶる興味深い事象である。

以上、『俳諧秘文抄』(『俳諧正語抄』)に見える芭蕉遺語に検討を加えてきたが、その他、通し番号②⑤(ここには遺語と見做してよい言葉も見える)、②⑥、②⑦等には、芭蕉のエピソードが詳しく記されている。が、これらのエピソードも、他に所見がない。逸話集としてよく知られている寛延四年(一七五二)刊、涼袋著『芭蕉翁頭陀物語』や、天明五年(一七八五)刊、蘭更編『俳諧世説』等の類にも掲載されていない独自のエピソードである。が、これらの、まずはフィクションであろうエピソードも、浪化の著作として伝播、流布されていった『俳諧秘文抄』、あるいは『俳諧正語抄』の中に置かれることによって、一部の読者には、信憑性のあるエピソードとして、芭蕉像構築のための一翼を担ったであろうことは、想像に難くない。そして、これもまた、芭蕉享受史の一事象として注目しておいてよいであろう。

\*

このようにして、『俳諧秘文抄』（『俳諧正語抄』）と他の蕉門俳論書とのかかわりを比較検討してみると、そこにも、どうしても支考の影が隠見することを否定し得ないのである。通し番号⑤に見える「始中終」「始終」なる俳論用語も、支考独自のものであるし、通し番号⑨に見える「風姿風情」の論も、支考が得意としたところである。

そこで、支考と浪化の関係を見てみると、元禄十四年（一七〇一）に刊行されている俳諧撰集『その花』は、浪化・万子・支考の共編である。また、支考は、まず、浪化の小祥忌（一周忌）追善集『霜のひかり』を元禄十六年（一七〇三）に編<sup>あ</sup>んで、その巻頭に心を込めての長文の「終焉記」を載せている。また、宝永六年（一七〇九）の七回忌にも、再び『白扇集』を編んで、追慕している。支考と浪化の交情は、すこぶる密であったと言えるであろう。とすれば、浪化の俳論書『俳諧秘文抄』（『俳諧正語抄』）に支考俳論の影響が見えることは、少しも不思議でないのであるが、それでは、右に検討してきたように、『俳諧秘文抄』（『俳諧正語抄』）を浪化の著作と断定してよいとなると、内容上、決定的な矛盾を有しているのである。そこで、視点を変えて、深交のあった支考が、浪化没後に、ゴーストライターとなって、浪化顕彰のために著わしたのではという考え方もでき、一部に、例えば、通し番号②⑥の「昔、翁、肥後の山中をこえ玉ふ時」の記述や、③④の「俳諧猿みの、炭俵の二集を俳諧の古今集なりと現して」の記述のように、ゴーストライター・支考ならば冒さないのであろうミスがあり、多少の不安が残るものの、全体的に見れば、十分に可能である。支考は、享保十六年（一七三二）、六十七歳で没しているので、先に検討した許六、其角、北枝の没年とも抵触しない。ただ、何箇所かのミスにこだわるならば、支考と浪化の親密な関係を知悉

していた支考の流れを汲む美濃派系の俳人によって著わされた浪化仮託の美濃派系俳論書、と結論しておくのが妥当なところであろうか。

#### 四 『俳諧秘文抄』を読む

最後に、芭蕉俳論享受史の側面から『俳諧秘文抄』（『俳諧正語抄』）を概観すると、我々の今日的芭蕉理解のためにも有益と思われる記述が随所に見られるので、それらの中のいくつかを指摘しておきたい。

まず、通し番号①の条に見える、

禅と和歌を合せて、いまの正風体の名を得玉へり。故翁生前の句、おほくは観相也。

である。①の芭蕉略伝中にも記されているように、芭蕉は、仏頂和尚に禅を学んでおり、また、芭蕉自身が、「俳諧もさすがに和歌の一体なり」（『去来抄』）と述べているように和歌性への目配りも十分になされているので、右のごとく「正風体」（蕉風体）の本質に「禅と和歌」を指摘することは的確であると思われるし、俳諧史の流れの中で芭蕉を見た場合にも、俳諧が「滑稽」（笑い）を特質とする文学であったとしても、芭蕉俳諧のこのような要素が、今日に至るまでの多くの人々の共感を得る要因となったであろうことは、否定できないであろう。そして、それとのかかわりにおいて、芭蕉の句が「おほくは観相也」との把握も、十分に首肯し得るのである。芭蕉句が、我々読者に多くのものを訴えかけてくるのも、要は、「観相」の句であるからであろう。

通し番号⑧の条に見える「題の縦横」への言及も、発句における「縦の題」「横の題」を簡潔に説明しているものとして貴重であろう。

題の縦横といふ事、縦は豎也。昔より和歌に用ひ来れる花鳥風月の定りたるを言ふ也。横といふは麵棒、摺小木の俗を言。此故に花・鳥・風・月を俗語にもてなし、疵を付る事なかれと也。横は格別にして、晒落を存分に任すべしとぞ。

「題の縦横」に関しては、其角の俳諧句合集『句兄弟』（元禄七年刊）、許六の俳論書『宇陀の法師』（元禄十五年刊）、俳諧撰集『目団扇』（享保五年刊）所収の孟遠の俳論「桃の杖」等においても言及されているが、右の『俳諧秘文抄』の私が付した傍点部など、特に一考に価するであろう。

通し番号②⑨の条には、芭蕉の辞世句とされている△旅に寝て夢は枯野をかけ廻る▽に対する別解が提示されていて、これはこれで、芭蕉作品享受史として見る時、興味尽きないものがある。ちなみに、『俳諧秘文抄』のこの句形にも注目しておいてよいであろう。『俳諧正語抄』では、一般に流布している句形△旅に病んで夢は枯野をかけ廻る▽で掲出されている。『俳諧秘文抄』の△旅に寝て▽の句形は、『猿雖本三冊子』『竹人本芭蕉翁全伝』に見られるものである。その解、

此句、辞世のやうにぞ心得たる人も有よし、さには非ず。人は死する迄、父母の恩愛を忘れざるを孝といふべし。今、父母の地を離れて旅に終る、何ぞ父母を慕ひ思はざらんや。

である。『俳諧秘文抄』（『俳諧正語抄』）全体が、すこぶる「道德」的色彩の濃い記述であることは一読明らかであり、右の解も、その一環としてのものではあるが、それにしても、このような独自の世界を一句に見ている点、面白いではないか（そして、従来の解、一句が「辞世」であることを重視し過ぎていたかもしれない）。

『俳諧秘文抄』（『俳諧正語抄』）中、注目すべき箇所は、なお少なくないが、小稿のまとめの意味もかねて、通し番号③②③⑤の次の二文に注目してみる。

③②今の世の人を見るに、俳諧をもて却て名利の種とする事、古翁の本意に非ず。かゝる人は、終にその大道を知らず。俳諧を芸の様におぼえて、上手下手と批判して、其心の至ると、いたらざるとを知らず。其名の世に聞え、人にも敬れて、一座の上に立ん事を好み、吾が門人と呼び、物にもしるし、巧言令色を専らとして、大欲無道の輩有。恐るべきの至極也。

③⑤近年は、殊勝なる行脚はみえず。たま／＼見るに、多くは俳諧のかすに酔ふて、たゞ放逸を風雅の大道と覺へて、理なくして、しかも貪る心深し。かゝる輩は、嶮難<sup>ケンナン</sup>を経る、是を浮世の修行と覺へたる也。されば、驕慢奢侈の心のみ盛んにして、果は他のよしあし迄觸歩行事を行脚と覺えしならん。

この二文に、浪化に仮託して『俳諧秘文抄』（『俳諧正語抄』）を執筆した著者の真摯な姿勢を見ることができであろう。ここに述べられている俳諧観、あるいは行脚観は、芭蕉の俳諧観、行脚観と方向を一にするものである。このような俳諧観、行脚観を有する支考系の俳人である何者かが、芭蕉俳論を敷衍、解説せんと執筆したのが『俳諧秘文抄』（『俳諧正語抄』）だったわけである。全体に宗教色（先に指摘した「道德」的色彩を含めて）が強いのは、執筆者が、越中井波瑞泉寺十一代住職浪化仮託の書であることを意識して、意図的に脚色した結果なのか、あるいは、執筆者自身の性行によるものなのかは不明である。が、私達は、ともかくも、芭蕉俳論享受史上、すこぶる興味深い資料を披見し得たのである。

（平成二年（一九九〇）十月二十二日了）

\*小稿を成すにあたって富士文庫旧蔵の『俳諧秘文抄』の翻刻使用を許可された旧富士文庫に御礼申し上げます。また、『俳諧正語抄』は、東京大学酒竹文庫本をマイクロフィルムによって使わせていただきました。これまた、御礼申し上げます。